

助成金事業

なごビオでは、自然環境保全の後継者育成を目的とする活動や、新たに取り組まれる保全活動を支援することで、次世代の担い手づくりや新たな活動の創出を応援しています。

開始から10年目にあたる令和6年度は、4件の助成を行いました。

また、令和3年度から助成金事業に対する寄付の募集を開始し、本年度は合計53,850円（銀行振り込み：30,000円、活動報告会における募金：23,850円）のご寄付をいただきました。ご協力ありがとうございました。

令和6年度 活動一覧

実施団体名（敬称略）	活動内容
地球ハグ倶楽部	みつばちと命のサイクルから学ぶ！ ～BeeHappy∞Project～
鳴子きずなの会	鳴子中央公園樹林地での子育てファミリーとの里山づくり
名古屋経済大学市邨高等学校	学校のビオトープ・緑地帯で行う 生物多様性に関する調査・体験・学習活動
東海中学校・高等学校生物部	東海中学・高等学校生物部活動報告

みつばちと命のサイクルから学ぶ～BeeHappy∞Project～

地球ハグ俱楽部 代表 坂部 里咲・副代表 高松 一史
ニホンミツバチ研究家 白金 丈英

はじめに

2020年3月から大高緑地等でニホンミツバチの調査・保護活動をしています。今年度は1年を通じて実践的に体験を通じて“みつばちの伝道師を育成”する活動を実施しました。

活動内容

●2024年度の活動

- ・6月8日(土)『夏を乗り切るお世話』
- ・6月30日(日)『巣枠からの春の採蜜』
- ・10月5日(土)『採蜜・蜜ろうの精製と利用』
- ・1月25日(土)プラチナ式巣箱づくり
- ・2月8日(土)ミツバチを迎える春仕事
- ・3月22日(土)蜜・花粉源植物について

実施内容

●6月8日(土)『夏を乗り切るお世話』



夏仕様4面巣門（実習）

オオスズメバチ対策のネット設置と巣箱を夏仕様の四面巣門に交換しました。

●6月30日(日)『巣枠からの春の採蜜』



巣枠からの春の採蜜（実習+座学）

実際に採蜜体験からミツバチの重要性を考えて頂きました。

●10月5日(土)『採蜜・蜜ろうの精製と利用』



ミツバチだけでなく、ハナバチなどポリネーター（花粉媒介者）にも注力して活動して行きたいと考えています。

●1月25日(土) プラチナ式巣箱づくり



2024年度卒業生の皆様

実際に重箱式巣箱を製作しました。

まとめ

表1. 図表 参加者人数（中間報告）

6/20 (夏仕事)	6/30 (春の採蜜)	10/5 (採蜜) 採蜜と蜜ろう の精製	1/25 巣箱づくり
4人	15人	10人	6人

みつばちを守る活動に賛同してくれた方に“みつばちの伝道師を育成”にこだわりました。

毎週1回の現地作業は1月末現在で、延べ39名の実習を行い現在も継続中です。

鳴子中央公園樹林地での子育てファミリーとの里山づくり

鳴子きずなの会 木村 浩二

はじめに

鳴子中央公園の樹林地の里山づくりは5年前に始まった。緑区の大高緑地で伐採した竹を材料にして落ち葉プールを作って近隣親子の遊び場にした。さらに翌年には植生調査を行い樹林地の状況を明らかにして課題を明確にした。

また自然観察会や落ち葉プールイベント、森の音楽会などを開催して森の楽しさを伝えながら地域住民に親しまれる森にしていった。

また2年前から二次天然林の里山維持のため、森の木の主力になりつつあった常緑低木の伐採や枝落としを行い、森の中に陽が当たり明るくなると同時に見通しがよくなり、親子や子供グループなどの森歩きが一気に増えた。

また枝が短くなったので子供たちの鬼ごっこやかくれんぼなどの遊びの拠点になり、それがさらに枝の伸長を妨げる循環が生まれた。

活動内容

当初、住民が樹種や花、果実などの特徴を覚えやすくするために樹種札代わりの二次元コード版の開発と設置を目指したが耐久性のある二次元コード版の開発が上手くいかず断念した。

I. 11月10日（日）「鳴子で楽しむ 鳴子を楽しむ 第1弾」（参加者150名）

まず森の収穫祭として梅本洋子講師がどんぐりの実生を通じて森の生物多様性が保たれていること、どんぐりなどの木の実やキノコの写真などで樹林地が地域の人の生活と深くかかわっていたことを説明した（参加者40名）。

その後落ち葉かき、落ち葉プール遊びをした後、落ち葉プールを掘っていきカブトムシの幼虫を見せ、飼育経験のある参加者にプレゼント。さらに底の方では4年前の落ち葉が堆肥となっていて、公園に咲く花などの土づくりに使われていることを説明すると驚きの声が上がった（参

加者30名）。

次のウォークラリーコーナーでは、名古屋市立大学の医学部などの学生が作成した樹林地イラストマップを頼りに鳴子関連クイズをグループで歩きながら相談する機会を作った。クイズではため池である鳴子池の成立過程や60年前の樹林地の木の種類などの設問に参加者は相談し合い、鳴子の森などの歴史に新しい关心を持った。また同時に森のいろいろなところを探し歩くことで森の魅力を再発見いろいろな世代の交流と健康づくりに役立つ森の理解を進めた（参加者120名）。

II. 12月8日（日）「鳴子で楽しむ 鳴子を楽しむ 第2弾」（参加者約50名）

落ち葉プールでは落ち葉をかき集めて実生を助け、落ち葉プール遊びをした後にカブトムシクイズ。「今どういう状態か？」「どのあたりにいるか？」を実際に掘ってみて解答。そして見つかった幼虫を参加者にプレゼント。

次は樹林地での恒例イベントになって来た森の音楽祭。今年は地域住民がキーボードとオカリナで日本のなつかしの曲を演奏。その後中国の楽器二胡のソロ演奏とfolklore演奏。



落ち葉プール遊び



森の音楽祭

まとめ

地域の人が森に親しみ楽しむ試みは4年間の種々のイベントを通じて相当進んだ。しかし地域の資源環境を自ら調べて関わる人を増やすところまでは行けなかったことは今後の課題である。

学校のビオトープ、緑地帯で行う生物多様性に関する調査・体験・学習活動

名古屋経済大学市邨高等学校 生物ゼミ 石川 ももか・岡田 夢空・小川 柚菜・安田 龍青・佐藤 豊

はじめに

本校は、名古屋市千種区にある都市の学校である。2023年度より、ユネスコスクール加盟校（図1）となり、準備段階からSDGs 15「陸の豊かさも守ろう」の取り組みを継続的に行ってきました。2022年度は、校内の施設の移転によるビオトープの一部縮小があったものの他は堅持され、科学研究部や市邨ゼミ（生物探求）、生物選択の生徒の主体的な学習活動の場となっている。



図1. 加盟用ロゴ

学校全体・教員の取り組み

【市邨ゼミ】 SDGsの目標に沿ったテーマのゼミが31種類あり、週2回行われている。生物のゼミは4つあり（推しの生きもの・海・園芸・花）、理科教員が担当している。受講生徒（高校2年生と3年生）の総数は、152名である。①先生の探究するテーマとともに使う。又は②自分でテーマを設定し探究する。準備→調査→発表準備→発表は、イベントの内容に応じて行っている。例として、「推しの生きもの」を探究しよう！では、なごや生物多様性保全活動協議会で培った活動の積み重ねが土台となっている。内容は、本校ビオトープの説明・千種公園探索・東山動植物園見学と自分で決定したテーマの探究を行うことである。

生徒の取り組み 体験・調査

校内の落ち葉を集めて堆肥化し、バイオマスの利用を学ぶ（図2）とともに、クモの調査・発表を行った（図3）。学内の生きものの調査は、2013年から昆虫、樹木、野鳥などで継続的に行っている。



図2. 落ち葉の堆肥化



図3. クモ調査の発表

生徒の取り組み 発表準備・発表

【学内での発表準備】 ブース発表では、推し鳥の羽を試験管に入れたストラップ（図4）を参加者と一緒に作成した。学内で教具の準備を行った（図5）。ブースで子どもたちを楽しませる理科教具の開発は、2003年より行っている。



図4. 推し鳥の羽試験管



図5. 教具準備

【学内での発表】 ゼミの中でテーマ毎に発表を行った（図6）。2025年2月12日と13日の市邨Exhibition dayは、学校を開放して行う。

【学外での発表】 なごや生物多様性センターユースまつり・授業改革フェスティバル・愛知サマーセミナー・理科フェス東京理科大学・名古屋市科学館イベント・名古屋青少年交流プラザまつり・市邨文化部合同発表会などで行った（図7）。



図6. ゼミ発表



図7. ブース発表

まとめ

これまでの少数の科学研究部員から始まった生物多様性の活動が、生物ゼミに波及し受講者が増加した。生物に関心を持っている生徒の活躍の場となっている。例えば、スズメの減少を調査した生徒は、校内にいる野鳥をテーマとし調査・発表した。これまでの活動を維持し、2025年度は、「観賞魚用水槽で海草の育成を行う」など新しい学びに挑戦したい。

東海中学・高等学校生物部活動報告

東海高等学校 生物部 部長 多田 己一郎

はじめに

東海中学・高等学校生物部では、中高合わせて約60名の部員が在籍し、興味を持った種類毎に虫、魚、両生・爬虫類の3班に分かれて活動を行う。

具体的には、野外での観察、採集、飼育、標本作成であり、部員が各自で採集した生物の一部は飼育、標本作成の対象とし、毎年9月開催の本校文化祭や、なごや生物多様性センター主催の同センター祭りにて展示を行っている。

今年度頂いた助成金を元に行なった活動事業と、そこから見えた課題についてここに報告する。

ネイチャーアクア・テラリウム事業

昨今、生物多様性の保全が喫緊の課題となっている。生物部で行なう野外調査や生物室での飼育、文化祭での展示、啓発活動などを活かして、自然に対し寄与できる事は無いか模索していた。そこで、「採集した個体の生育環境を水槽内で再現すれば、自然に近い生態が観察出来るのではないか」と考えた。まずは第一目標“長期飼育”を行い、得られたノウハウを第二、第三の目標である繁殖そして保全へと役立てていく。

●ヤマトイワナ水槽

令和6年5月5日に木曽川水系上流にて採集した2個体を迎えて入れた。ヤマトイワナは生息数が減少しているため、個体数を限定して採集を実施した。本種の飼育においては、水流発生装置、冷却器、外部濾過装置3台を用いるなど、生息する渓流域の環境を可能な限り再現した。

当初2個体の飼育であったが、片方の個体は採集当時眼球が負傷しておりそれに伴う衰弱もあり、現在では1個体のみの飼育となっている。なお当個体は飼育8ヶ月目で体調も安定している。

●ガエル水槽

今年度より活動を開始した両生・爬虫類班もネイチャーアクア・テラリウム事業に取り組んでいる。初年度はヌマガエル1匹、ニホンアカガエル、タ

ゴガエル各1匹の2水槽を作成した。



ヤマトイワナの飼育水槽

課題

- ①ヤマトイワナ等の渓流魚の飼育は、文献やインターネットの情報も薄く、飼育経験者も少ない。
→専門機関からの助言を受ける必要がある。
- ②生育環境を水槽内に再現することをコンセプトにしているが、具体的にどこまでの範囲までなら再現可能なのか。
→今年度魚班では、時間的、技術的な制約からネイチャーアクアリウム事業として再現できた水槽はヤマトイワナ水槽に留まっている。来年度以降、中流、下流域や海水水槽の作成を行う上で、植物と動物との共生関係や藻場、ゴロタ場等の場所による変化にも注目して再現を行う方針である。

まとめ

今年度は今まで触ることのできなかった生物をより自然に近い状態で飼育、観察することができた。同時に、飼育についての情報が少ない種の長期飼育やその先の繁殖、保全においては生徒だけの力での実現が難しいことも実感した。よって来年度他学校との交流、専門機関に協力を仰ぐなど、今まで自分たちだけの力では辿り着けなかった生物の振る舞いが観察できるよう最大限に努力する。

部活動としての利点を活かした事業を展開し、今後も日本の自然環境保全に貢献していく。